

---

# ロケットの赤い糸

小出 あかり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロケットの赤い糸

### 【Nコード】

N6440D

### 【作者名】

小出 あかり

### 【あらすじ】

持ち主となるべき人とモノとは、赤い糸で繋がっていると信じる主人公の由美。ある雨の日、偶然入った雑貨屋で見つけた銀のロケットに、一目惚れをするのだが・・・。

……ない。

ない。

昨日までここにあったはずの、ロケットのペンダント。それがどこにも見あたらない。

藤川由美はすぐ目の前の棚の上を、何度も何度も目で追った。そしてそれでも無いと分かると、周囲を見回し、『それ』がありそうな場所を探す。

アクセサリーの売り場は、小さな店の中程にあった。白い木枠にガラスが嵌め込まれた、大きなガラスのショーケース。その中には、銀やビーズ、ガラス玉や天然石などで出来た、手づくりの素朴なペンダントや指輪たち。棚の上に、同じ間隔を空けて、きれいに並べられている。

由美は上の段から順に、目を皿のようにして、お目当ての品を探した。

2段目、3段目、4段目……。

由美の視線は、徐々に下の段へと降りていく。

「何かお探しですか？」

突然声をかけられ、由美はびくっと振り返る。

そこには、この店の店員らしき女性が1人、立っていた。

女性店員は由美の顔を見るなり、

「ああ、もしかして、昨日の……」  
と言った。

「あのペンダントを探しているんですね」

よく見ると、女性店員の顔には見覚えがあった。左目の泣きぼくろが印象的な、ウェーブのかかった長い髪の女性。白い服が良く似合う。この店にいて、店の風景に溶け込んでしまいそうな、そんな人だ。

由美は少し安心して、そして女性店員に向かって、小さくうなずいた。

昨日の昼すぎ頃、町には雨が降っていた。バス停の前でバスを待っていた由美は、急に降り出した雨に驚き、カバンの中を見た。しかしその日に限って傘はない。仕方なく雨宿りの出来そうな場所を探して周囲を見回し、道路の向こう側に緑色の木の立て看板を見つけた。

看板の向こうは美容院。その2階部分に、雑貨屋らしき店構え。

あれ？ こんなところに雑貨屋なんか、あったかな？

由美は首をかしげつつも、好奇心に駆られてその店に入ることにした。

外付けの階段をのぼってすぐのところ。そこは、ナチュラル雑貨の店だった。

木の扉を開けて中に入ると、ブリキでできたバケツやジョウロ、観葉植物、サボテンの鉢植えなどが並ぶ。そのすぐそばの棚には、石鹸やタオル、お香、アロマキャンドルなどが並び、なんとも言いえない甘い香りがたちこめる。

店は居心地の良い、揺りかごのようだ。

由美はぶらぶらと店内を歩いた。時々品物を手にとって眺めたり、値札を見たりした。どれもこれも、由美の好みの雑貨たちだ。

そして店の中ほどにやって来る。

そこには大きなガラスのショーケースと、白くて丸い木のテーブルが並んでいた。アクセサリー売り場のコーナーのようだ。

目についたベネチアンビーズのペンダントに、由美は目を輝かせる。吸い寄せられるように、他の品々にも目を移す。銀製品、ビーズの指輪、さまざまなアクセサリーたちは、ガラスケースの中で等間隔に置かれ、「私を買って」と由美に訴えかけてくる。

そんな中、ひととき目立つ品物があった。

銀の口ケツト。

今まさに、由美が探している最中の品物。

由美はすぐに、コレだ！と思った。

まさに、探していたものは、コレだ。

直感で感じた。

どこが？ と聞かれると、どこが良いのか良く分からなかった。

銀のロケットは、外側に花の模様があしらわれ、小さな青い宝石が嵌め込まれていた。

一目惚れ。そんな言葉が頭をよぎる。

由美はすぐさまその品物に手を伸ばし、値札を見た。そして、思考は止まる。

高い。思っていたより、値が張る。そして今、由美の財布の中には、それを買うだけのお金はない。

由美は考えた。

そしてもう一度、ロケットを見た。

そして、また考える。

そしてもう一度、ロケットを見た。

……明日、買おう。

明日、この銀のロケットを買い取るだけのお金を持って、またこの店に来て、そしてこのペンダントを手に入れる。そうしよう。

由美は決めた。

明日になれば、これは私のもの。

まさか、そんなにすぐに、売り切れてしまうなんてことはないはずだ……。

ある時友達が、学校にロケットのペンダントを持ってきた。

そして、恋人の写真を自慢げに見せびらかした。由美はそれを、うらやましげに見ていた。

ロケットがうらやましいのか、恋人がうらやましいのか。いや、その両方かもしれない。由美は、すぐにロケットのペンダントを手に入れることに決めた。

だが、由美には恋人はいない。

ロケットのペンダントを買ったところで、入れる写真は無いのだ。しかし、由美はそれを、こう解釈した。

誰か、大事な人を作りたいという思いこそが、もしかしたら恋人を引き寄せるかもしれない。

だから由美は、友達との一件があったあと、度々アクセサリーショップなどを訪れ、気に入ったロケットを探し続けた。

しかしこれまで見たものは、どれもピンと来なかった。それで由美は思った。

人と同じように、ものにも縁のようなものがあって、持ち主となるべき人と物とは、赤い糸でつながっているに違いない。

だから、由美はその赤い糸を探すように、慎重にお気に入りのロケットを探したのだった。

しかし。

出会いは、一期一会だな、と由美は思う。

昨日出会い、そして今日にはなくなっているなんて。

雨に降られて偶然入った雑貨屋。そこで出会った銀のロケット。

出会いはまさに、運命的。ところが、女性店員は非情にもこう告げる。

「あのペンダントは、先ほど別のお客さんが買っていかれました」

由美はがっくり肩を落とし、他の品物には目もくれず、すぐに雑貨屋を飛び出した。

帰りのバスは、今しがた去っていったばかり。

仕方なく、由美はバスに乗らず、徒歩で帰ることにした。そしてバス通りの並木道を歩いて10分ほど経った頃、大きな公園の前に出た。

何やら、公園の中が騒がしい。

ふと見ると、公園の入り口付近の広場では、フリーマーケットをやっている。

由美は公園内に入り、フリーマーケットの店が点々と並ぶほうへ

と足を向けた。

骨董品、古着、おもちゃ、靴、カバン、時計……。いろんなものが、雑多に並べられた小さな店々。敷物の上に並んだ商品を眺めつつ、由美はフリーマーケットの会場を一周した。

小さな会場だ。あっという間に、全て見終わってしまい、一周してまた入り口近くへ戻って来た。

いや、もう一つ、店が残っている。

由美は最後に、フリーマーケット会場の入り口近くにあった店を覗くことにした。

そこは、銀細工のアクセサリが並ぶ店だった。

由美はふと、先程の雑貨屋のことを思い出し、そしてまた、あの売り切れてしまった銀のロケットのことを思い出した。急に胸が切なくなつた。

敷物の上に並べられた銀のアクセサリを一つ一つ見ていく。その中に一つ、きれいな銀のロケットがあった。

それは、バス通りの雑貨屋で見たロケットにとても良く似ていた。表面に四つ葉のクローバーの細工がほどこされた、楕円型のロケット。緑色の宝石が嵌め込まれている。

「これ……」

由美が売り子をしている男の子に声をかけると、男の子が顔をあげた。

そして、由美の指さしたペンダントを見てこう言った。

「ああ、これね。売り物じゃないんだ」

由美は驚いて訊ねた。

「えっ、売り物じゃないのに、何で置いているの？」

すると、由美と同じ年頃の売り子の男の子は、こう答えた。

「これはね、前に来たお客さんから、取り置きをして欲しいと頼まれたものなんだ。だけど、その人、いくら待っても来ないんだ」

そして今度は、男の子が由美に聞いた。

「どうしてこれが欲しいの？」

いきなりそんなことを聞かれるとは思っていなかった由美は、

「あ、そ、それは……ロケットに大事な人の写真を入れてみたくなつたから」と答えた。

「大事な人？ 恋人か何か？」

由美は顔を赤らめた。まだいない。そんな人が出てくることを願ってロケットを買う、なんて、そんなことは恥ずかしくて言えないと、由美は思つて黙つた。

すると男の子は、こんなことを言い出した。

「そつだ。もしもさつき取り置きをして欲しいと言つた人が、今日中に現れなかつたら、このペンダントはキミに譲つてあげるよ」

「え？ どうして？」

由美が聞く。男の子は言う。

「この店は、今日限りだから」

そして男の子は、こう付け加えた。

「モノにはさ、運命の赤い糸があると思わない？ 一目惚れして買つと、そのものはとても大事な宝物になるんだよ」

由美はドキツとした。

ああ、この人も、私と同じことを考えているんだ……。

由美は男の子の顔を見た。整つた顔つきで、笑顔のきれいな男の子だ。

由美はお礼を言つて別れ、そしてまたフリーマーケットの会場を一周することにした。

だが、銀のロケットのことで頭が一杯で、他の品物は、まともに見ることが出来ない。

由美は近くの自動販売機でミルクティーを買い、そして缶のふたをあけた。

一息ついた。

そして、フリーマーケット会場を後にし、公園を一周することにした。緑の中で心を落ち着かせ、そしてまたロケットのことを考えた。



今度こそ。

今度こそ、あのロケットは自分のものになるかもしれない。いや、でも、もしかしたら、取り置きをした人が、取りに来るかもしれない……。そしたらまた、新しいロケットを探すことになるのかな。運命の赤い糸、本当にあるのかな……。

一時間後。時間をつぶし、由美は再びフリーマーケットの会場へと戻って来た。

あの男の子のいる、銀のアクセサリー屋が近づくにつれ、由美の胸は高鳴った。

ああ、運命かもしれないモノとの出会いって、何かドキドキするな。今度のはどうだろう？ 本当に、運命のロケットなのかな……。そして、由美は、売り子の男の子に声をかけた。

「あのう……」

「やあ」

男の子は由美を見て、ちよつとすまなそうな顔をした。

「ごめん。やっぱりあのペンダントはね、最初に取り置きをしていた人が、持っていてっちゃったよ」

そして男の子は言った。

「だけどかわりに、コレをキミにあげることにした」

男の子は、自分の首にさげていたペンダントを外し、ロケットのふたを開けた。中に入っていた写真を取り出し、またパチリとふたを閉めた。

由美は驚いた。

そのペンダントは、あのバス通りの雑貨屋で見たのと同じペンダントだった。

いや、だけどちよつとだけ違うところがある。

宝石の色は、オレンジだった。

「私、これと同じものが欲しかったの！」

由美がそう言うと、男の子は聞いた。

「もしかして、バス通りの雑貨屋で見たの？」

由美はうなずいた。

「一目惚れしたの。このペンダントに。でも、買いに行こうと思った時にはもう……」

「姉貴が喜ぶよ」

男の子は笑った。

「この店の大半のアクセサリは、僕と姉貴が作ったんだ。もちろん、このペンダントもね」

男の子はペンダントを、由美の手の上に置いた。

「でも、これはあなたのもでしょ？ いいの？ 貰っても」

男の子は言った。

「また、作ってもらおうよ。いや、今度は自分で作ってみようかな」  
そう言うと、店を片付けはじめた。

由美は男の子が片付けをしている傍らで、声をかけようと思った。  
また、会える？

しかしその一言は、結局言い出すことが出来なかった。

由美は銀のロケットをカバンにしまい、そしてフリーマーケットを後にした。

大半の店はすでに引き上げており、フリーマーケット会場は、閑散とした雰囲気になっている。

空は、赤と青がいい具合に混ざり合い、いい具合に溶け合っている。赤い雲が風にながされ、宵闇へ向かって進んでいる。

由美が振り返ると、もう、男の子の姿はなかった。

次のフリーマーケットの開催日、由美は再び公園にやって来た。もしかしたら、またあの男の子に会えるかもしれないという、淡い期待を抱いて。

だが、男の子本人が言っていたように、あの日一日限りの店だったようだ。

銀細工を売る店は、どこを探してもなかった。

由美は思う。

ロケットのペンダントには、赤い糸はあったけど、男の子の間には、運命の赤い糸はなかったんだと。

ロケットの中には、まだ、誰の写真も入っていなかった。

だが由美は信じていた。運命の銀のロケットは、いつか素敵な彼氏を導いてくれると。

胸元のロケットを握りしめ、由美は公園を後にした。公園は、フリーマーケットに来た客たちで、にぎわっていた。

まだ、空は青い。

もつじきあの日のような、夕焼けが来るかもしれない……由美はそう思いながら、また歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6440d/>

---

ロケットの赤い糸

2010年10月8日15時49分発行